

臼井・佐藤・松下 論文
「新型コロナウイルス感染症の影響下におけるワーク・ライフ・バランス」へのコメント

労働政策フォーラム
ワーク・ライフ・バランス研究の新局面
～データ活用基盤の整備に向けて～

2022年3月3日

青山学院大学経済学部 安井健悟

本研究の背景・目的

背景

➤日本の男性の家事・育児の時間は短く、女性に負担が偏っている。

目的

➤新型コロナウイルス感染症が拡大するなかで普及したテレワークや勤務時間制限等が子育て世帯の男女の以下の点に与えた影響を実証的に分析
(一部については未婚者も対象)

家事・育児の負担感や時間、労働時間、家族と過ごす時間、労働時間、仕事の主観的な生産性、生活満足度、健康満足度、仕事満足度、子育てのしやすさ、社会とのつながり、生活の楽しさ

データ・分析手法

データ

内閣府 インターネット調査

『新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査』
第1回（2020年5月～6月）、第2回（2020年12月）、第3回（2021年4月～5月）、第4回（2021年9月～10月）

分析手法

疑似的な階差モデル → 観察されない異質性が生むバイアスを除去

$$\Delta y_{it} = \beta_0 + \beta_1 \Delta telework_{it} + \beta_2 \Delta SP telework_{it} + \beta_3 year_t + \mathbf{X}'_i \boldsymbol{\beta} + \Delta \varepsilon_{it}$$

Δy_{it} 調査時点での2019年12月からの変化

$\Delta telework_{it}$ 調査時点でテレワークしているか否か（2019年12月は0と仮定）
（勤務時間の制限等も同様の作成方法？）

分析結果

子どもがいる既婚男性

本人がテレワーク実施

家事・育児の負担感	↑	家事・育児時間	↑	家族と過ごす時間	↑
生活満足度	↑	労働時間	↓	生産性	↓

妻がテレワーク実施

家事・育児の負担感	↑	家事・育児時間	↑	家族と過ごす時間	↑
-----------	---	---------	---	----------	---

子どもがいる既婚女性

本人がテレワーク実施

勤務時間縮減

家事・育児の負担感	↑		
家族と過ごす時間	↑	生産性	↓

夫がテレワーク実施

家事・育児の負担感と時間に影響なし

本論文の意義

データの活用

本論文が用いた内閣府調査のデータは既存研究（Inoue *et al.*(2021)、Sugano (2021)）も利用しているが、まだ十分に利用されていない情報（配偶者の情報、勤務日制限等の情報、第3回・第4回調査の情報）も駆使して（利用しつくして）分析している点に意義がある。

ワーク・ライフ・バランス研究として

コロナ禍におけるポジティブな側面としてのテレワーク促進という状況を利用して、家事・育児負担についての男女間の偏りやワーク・ライフ・バランスに対してテレワークがどのような影響を与えているのかを明らかにしている点で意義がある。

コメント1 解釈の難しさについて

- 既婚男性がテレワークすると本人の家事・育児の負担感・時間は増えるが、配偶者の女性の負担感・時間は減らさない。
- 既婚女性がテレワークすると家事・育児の負担感が増えるが、配偶者の男性の負担感・時間を増やす。

何が起きているのか？

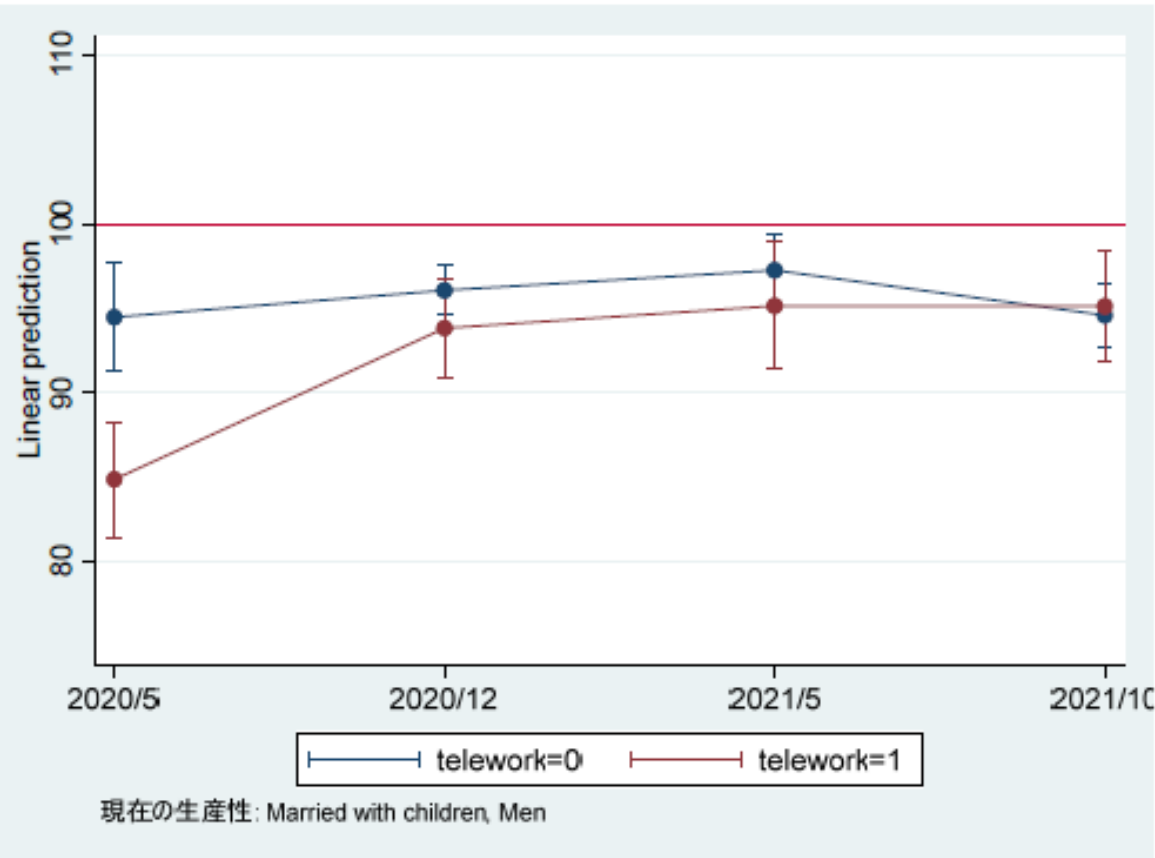
休校・休園などで家事・育児を多くしなければならないような親がテレワークをしていて、世帯内での家事・育児の総量が増えているために、配偶者がテレワークしている状況では本人の家事・育児も増えているのでは？

(論文内でも結果を記述する際には因果関係を想起させないような表現である)

- 分析結果そのものからの素直なインプリケーションを出すことが難しい？
- Inoue *et al.*(2021)のように第2回調査に含まれる2019年の情報を操作変数にして、階差モデルに操作変数を用いて推定してみてもは？

コメント 2 時系列でのテレワークの影響の比較について

図3 既婚男性・子どもあり



「第1回調査時点ではテレワーク実施者の主観的な生産性の低下幅は、テレワークをしていない者に比べ9.1ポイントと大きく低下したが、第2回・第3回にはその差は2.1ポイント、2.4ポイントと大幅に縮小し、第4回にはテレワーク実施者と非実施者の差はほぼ解消した（0.5ポイント）。」

- テレワークしやすい労働者のみがテレワークを継続した可能性
- = テレワークしている人の質が変化しているのであれば他の図の比較も注意が必要
- 継続して調査に協力している人の中でテレワークし続ける人を確認しては？

このような研究のさらなる発展にはどのようなデータの利用が望まれるか

- 今回の調査は貴重だが、パネルの構造になっていないこともあり、分析者がかなり工夫をしている。
- 理想を言えば、平時から実施されている大規模なパネル調査に対して、追加的な調査で最小限の質問だけを機動的にできる状況が望ましい。